

◀S·E·L·D·A·A▶

No.13

平成3年11月20日 発行

上智大学英語学科同窓会
東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学英語学科事務室 気付

Sophia English Language Department Alumni Association

'91年度臨時総会開かれる

英語学科同窓会会長 関 浩一 (昭和39年卒)

1991年度 SELDAA 臨時総会は、約80名の会員の出席をいただき、4月20日(土)午後、上智会館で開催されました。

総会開催の目的の一つは、会則の一部改定にあります。SELDAA も発足以来6年、私共常任委員としては、旧交をあたためる同窓会から一歩進んで、卒業生、学校当局、学生の三者の関係を深め、会員の皆様のお役に立つ活動のできる会にしたいと考えておりました。

従来、会則によると、会の運営は、常任委員会と、各卒業年度2名の代表から成る幹事会に任されておりました。ところが、過去6年間、幹事会には、ほとんど出席者が無く、有名無実化していました。そこで、この幹事会を廃止し、代りに常任委員の定員を増やし、活動の活性化を計ろうと、幹事会に係る会則の改定を総会に付議した次第です。討議の結果、改定案は承認され、常任委員は、現在の6名から10名に増員、総会は従来3年に一度から、毎年開催することになりました。



会則改定が承認された後、各常任委員より活動報告がされ、各々承認されました。活動の主なものは、① BTF 講座の新設、② 女性対象の英語によるセミナー、③ 会報の発行、④ 名簿の発行、⑤ 野口基金の活用状況、等で、現在検討中のものとして、卒業生を対象とした「人材バンク」構想が報告されました。その後、1990年度決算報告書並びに1991年度予算案が承認可決され、総会を終了しました。

総会終了後、懇親パーティーに移り、ニッセル先生より「第二の青春：SECOND SPRING」、松尾学科長による「上智大生の学生気質、今昔」、更に、特別ゲストとして、TV で活躍中の隈部まち子氏から、「世界を動かした名言」(同名の著書あり)と、三氏による講演があり、6時過ぎパーティーを終りました。

私共常任委員としては、SELDAA が、会員の皆様にとって、より身近かな、意味のある組織になるよう努力を続けるつもりでおります。本年より毎年開催されることになりました総会には、お気軽に御出席いただき、御意見をお聞かせいただければと思っております。



SELDAA人材バンクシステムの名称とシンボルマークが決定!

前号でご案内した通り、SELDAA 常任委員会では、少しでも会員の皆様のお役に立ち、SELDAA の存在意義を高める活動の一つとして、SELDAA 会員及び上智大学英語学科在校生を対象とした人材バンクシステムを開設する準備を進めております。

目的は、せっかく英語学科で身に付けた英語力が眠ったままになっている埋もれた人材を、男女を問わず人材難で求人中の企業や団体に紹介しようというもの。現在の職場に満足出来ない人や、家庭に入ったのち再就職やパートタイムの仕事を探しているような SELDAA 会員や、在校生が対象です。若干の事務費用を登録料として徴収はしますが、あくまで非営利の活動です。内容は、求職者、求人企業（個人、団体等でも可）とも、募集内容を事務局にお寄せ頂き、事務局でデータベースとして処理したのち、条件が大体合致するケースを求人側にご紹介しようというサービスです。求職側の利用資格はあくまで、SELDAA 会員である英語学科卒業生及び在校生に限りませんが、求人側は、広く門戸を開放し、上智大学英語学科卒業生の能力と人柄を信頼し、求めて下さる企業、団体等なら、資格を問いません。むしろ、卒業生の皆様のおお役に立っている

企業、団体等から、ご自分の同窓生なら安心、というご推薦や求人を歓迎致しますので、広くこの人材バンクシステムを口コミで伝えて下さるようお願い致します。

目下、事務局の開設に向けて努力中で、応募方法や登録料等の詳細を次号の会報でご案内する予定ですが、さし当たって、この人材バンクシステムの愛称が Sophia English Language Network の意で、SELNET と決まり、またシンボルマークのデザインも、図のように決まりました。

SELNET

この件に関する、ご意見やお問い合わせは下記までお寄せ下さい。

〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学英語学科事務室内
SELDAA 係 宛

英語学科BTF (Back to the Future) 講座 開講

すでにご案内のように、今年4月から社会で活躍している英語学科卒業生が講師になり、学科生に講義を行うユニークな講座が学科の一単位としてスタートしました。これは、講師の仕事内容・国際人としての役割、国際化の中の会社の位置など、学生が日頃の講義だけではなかなか実感として捕らえにくい“生きた実社会”の実態を経験豊富な社会人から勉強してもらおうという講座です。週1回1日90分の講義を3週行い、4週目をその講義内容に関するクラスディスカッションというユニットで、4月26日から3か月間熱心な学生の聴講のもとに前期を終了しました。

学生の登録は、1年生から4年生まで85名で6号館212教室が満杯になる盛況さでした。講師の方は事前準備した資料を学生に配布したり、実体験からの話しを熱っぽく講義されました。一方学生は、講義内容に魅了され、毎回突っ込んだ質問を投げかけ、数年後の自らの社会におけるノウハウを得ようと懸命の

様子でした。

以下、前期の講義内容を同窓生の皆さんに概略として報告しておきます。



前期 BTF 講座所感

英語学科学科長 松尾 式之

この新しい試みは、学生の中に大きな感動の輪を残しました。日本にもあまり例のないこのコースは、ひとえに SELDAA の支持があったからこそできたわけで、学科長として皆さんに心からお礼を申し上げます。

学生が書いた最終レポートの言葉です：「お三方とも独特でダイナミックな生き方をされている。それをまねするのではなく、参考にして自分の生き方を形作っていきたいと思う」彼らが見ていたのは、

先輩の仕事の中身もさることながら、その生きざまなのです。

またいわく「卒業生は同窓会に加入することによりコミュニケーションを図ることが可能だが、卒業生と在校生の接点は少ない」学生は社会に出た人生の先輩たちと話し合いの機会を持つことを、痛烈に望んでいるのです。

前期が終わったところで関係者と学生が集まってパーティーを開きましたが、和気あいあいのなかで時間も、年齢差も、社会的地位もワーブしてしまいました。長い目で見て、このような交流のなかから何かが生まれてくればしたものです。この講座、英語学科が続く限り続けていって頂きたいものです。

第1回講座 (1991年4月26日～5月24日)

長縄友明氏(松下電器産業(株)法務二部部長昭和39年卒)

『日本企業の国際化と国際法務職能』

日本の企業が猛烈なスピードで国際化をはかり、国際企業として海外で発展してきましたが、この背景には、国際法務という重要な要素があります。国際化を図る日本・海外勤務中に確立された国際法務実務、予防法務、米国 Zenith 社対松下ほかの独禁法訴訟、EC 対日本企業の独禁法審判の諸ケース、国際取引・提携・契約・買収さらに日米構造協議にまで多岐にわたる範囲で講義を行っていただきました。

現在も、今後も、国際間に関わりを持つ企業にとって、国際法務の重要性およびその成否が企業の発展につながることを強調されて講義を終了致しました。



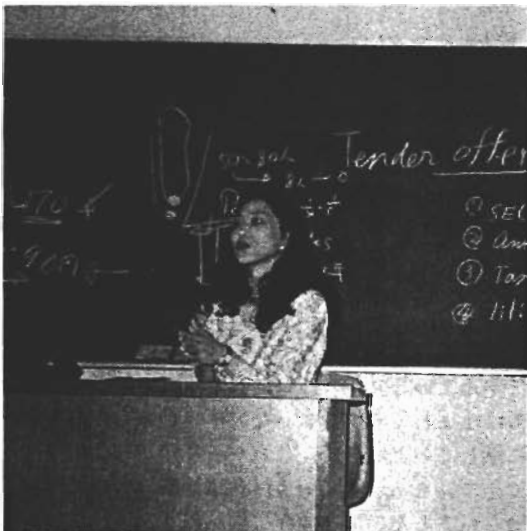
第2回講座 (1991年5月31日～6月7日)

安田尚代氏(外国法事務弁護士(ニューヨーク州)0
ミルバンク・ツィード・ハトリ&マックロイ 昭和59年卒)

『私が外国法事務弁護士となるまで』

日本人では極めて異例である外国法事務弁護士として活躍している安田氏の講義は2回に渡り、1回目はアメリカの大学院のロースクールに進学する過程、ロースクールでの日々、2回目は司法試験から就職して、実際にウォール・ストリートで活躍するに至るまでを語られました。

ご自身の経験談を通じて、日米の法制度の違い、法意識そのものの違い、アメリカ社会における弁護士の役割なども説明なさり、大変興味深い内容の講義となりました。

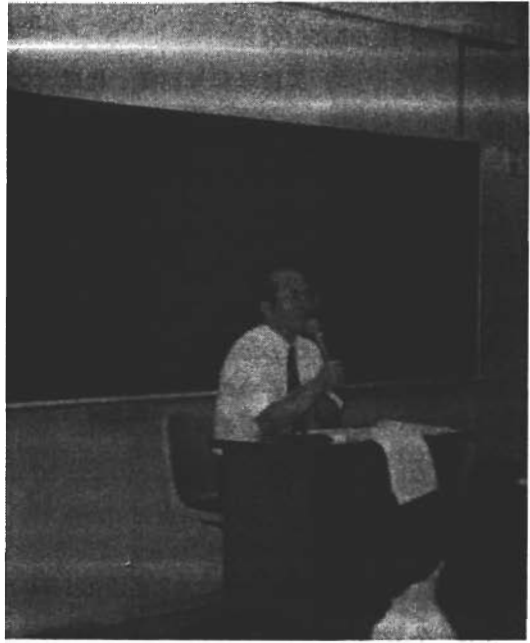


第3回講座 (1991年6月21日～7月12日)

安田鈔暁氏(日産自動車㈱海外部部長 昭和41年卒)

『海外における日本企業と異文化コミュニケーション』

各種産業界の日本企業が国際社会において経営を行っている現在、現地で成功をするための秘訣を英国日産のケースを例に話を進められました。経営的なノウハウは勿論のこと、歴史・生活・ものの考え方の違う異文化とのコミュニケーションが最も大切なものであることを語られました。ヨーロッパ(特にイギリス)でいわゆる「普遍的価値観」ともいえる“independent”, “right”, “freedom”を理解尊重する姿勢がなにより重要である。対して、日本人はとかく“義務”が先行してしまい国際的立場にある日本企業ではかえってマイナスになってしまうとのお話でした。欧米とのコミュニケーションギャップを早く、確実に埋めていく必要性を強調されました。



『BTF 講座』前期聴講後の感想(抜粋)

●第1回講義より

普通の授業では味わえない、また、社会に出てからでは覗きにくい世界を知ることができた、という感じでした。(2年 福田淑子)

日本の経済力は、世界の中でも、最も進んでいるほうだと単純に思っていた私は、その陰で、並々ならない苦勞や努力をしてこられた方々のことを、余りにも知らなさすぎたと、反省させられました。(2年 森扶二子)

自分が、会社や仕事というものに対して抱いていた曖昧なイメージが、はっきりしたものになってきた。(3年 K. HIROZAWA)

ビジネスの世界とは普段接することの少ない学生、特に文、語学系の学生にとって、こういったお話を伺えるチャンスは非常に貴重だと思います。(4年 若松史枝)

●第2回講義より

一大スペクトル冒険活劇をどうもありがとうございます。息をのむほどの展開に、私は時のたつのも忘れ、ただ瞳孔開きっぱなしの状態でした。眼前に広がる大画面にはまばゆいばかりのマンハッタン夜景、これぞ真にアメリカンドリームと言うのですね。単身で渡米され、ここまでやってこられた安

田さんには、ただ、ただ、敬意を表すばかりです。(4年 沼田篤彦)

彼女の話には、アメリカの実力主義のすさまじさを感じます。(87年入学 中村憲幸)

日本にも、これだけ素晴らしい生き方をしている女性がいるという事を知って、日本女性もなかなか捨てたものではない、と頼もしく思った。お話を聞いて、とにかくベルが鳴ってから1時間45分、初めから終りまで、とても興味深いお話をしてくださり、大変ためになった。(4年 秋沢真澄)

●第3回講義より

安田さんが、イギリスで体験なさった価値観の相違についてのお話はとても興味深いものであった。

(1年 菊地美和)

随所に述べられる安田氏の体験談は、本当に現場の生の声であり、安田氏ご自身のポリシーも伝わってきて、「大先輩」の威力が感じられた。(2年 小池晴子)

日本国内にとどまっていたら知らなければ知らないですんでいた文化の違い、またそれを知っているが為に生まれてきてしまった日本へのいらだちを素直に話していただけて、これから私達が社会に出ていく上で持ちあわせていくべき価値観について考えさせられました。(4年 岡崎敦子)

BTF講座後期のスケジュール

第4回講座 (1991年10月4日)

関 浩一氏 (蛇の目マシン工業株
専務取締役 昭和39年卒)

『大学と英語・企業と英語・私と英語』

学生時代の勉強は主に“自習”と称し、自分自身で本を読み考えることが多かったことや、よく友人をつかまえてはマージャンばかりをしていたなど、学生時代にやったこと、やり残したことをユーモアたっぷりに話された。また、社会人になって、この学生時代の生活が、人間関係理解・ものの考え方、知識など、会社生活に役立ったこと、さらに人生の危機を乗り越えるのも学生時代に培った「精神的体力」が今でもあらゆる側面で役立っていることを強調され、大変興味のある講義を終えられました。



第6回講座 11月8日・15日

長窪正寛氏 (昭和48年卒)
テレビ朝日 CNN デイウォッチ
キャスター/TBS ラジオニュー
ス・コメンテーター

第7回講座 11月22日

長谷部真理氏 (昭和63年卒)
同時通訳者



第5回講座 (1991年10月11日・18日)

富留宮ユカ氏 (外務省・海外広報課 昭和59年卒)

『外務省・職業としての外交官』

学生時代、英語学科生という枠組みの中で何ができるかと考え女性も活躍できる職種は、などの模索の後、通訳になる努力が結実し、さらに本当のやりがいのある仕事を求めて外務省の専門職試験をパス。これまでの女性としての努力を魅力たっぷりに話され、さらに一人前の外交官となる過程の中で、英語学科で学び、身についた事柄、受験勉強を通しての自分の成長など話されました。今や、韓国という国の奥の深さも見えてきて、韓国の専門家という自負のもと現在の仕事にやりがいを感じていますとのこと。(『職業としての外交官』は10月18日講義予定)

第8回講座 11月29日

平井卓也氏 (昭和55年卒)
西日本放送代表取締役社長

第9回講座 12月13日

鈴木由香里氏 (昭和53年卒)
日本興業銀行・米国委員会兼国際業
務部

(10月25日・12月6日・20日はクラス討論会になります。なお講師に、適材の方を自薦他薦で事務局まで是非ご連絡ください。)

卒業生便り

南の人、北の人

外務省海外広報課 富留宮ユカ（昭和59年卒）

今年の5月上旬、1週間ほど平壤に滞在する機会を得た。北朝鮮と言うと、平壤放送の戦闘的なアナウンスというイメージがあったせい、北の人達も普段は韓国の人と同じように「普通に」喋っているのだ、ということさえも「大発見」であった。今考えると笑い話に近いものがあるが、その時はそれだけのことで随分緊張が和らいだものだった。

しかし、だからと言って気を許すこともできなかった。5月1日はメーデーということで、公園は食べ物の屋台で一杯になっており、私もリラックスして散歩する人達に話しかけていたのだが、突然小学生の女の子が故意に私の腕にソフトクリームを押しつけた。振り向いても、逃げもせずただ黙ってこちらを睨んでいる。周囲の大人達もじっとこちらを見つめたままで何も言わない。気味が悪くなって、そそくさとその場を立ち去った。この話を北朝鮮の案内係の人やホテルの従業員にしたら、皆口を揃えて「それは南の人に間違えられたのですよ。」と言う



のだった。

私はこの一件が未だに心のどこかに引っ掛かっている。平壤ではニコニコと日本語で話しかけてくる人はいても、日本人であるが故に敵意を示す人は全くいない。日本語がうるさい、とあからさまに何度も言われたソウルでの4年間とは大違いだ。しかし、同族への敵意は表せても、憎んで当然の国から来た人間には作り笑いを浮かべなければいけないとはどういうことなのだろうか。むしろ、素直に「反日」をぶつけてくれた方がずっと気分的に楽だったと思う。時には喧嘩をしながらも、正直に気持ちをぶつけていたソウルでの生活も悪いものではなかったと、今更乍ら懐かしく思う次第である。

過ぎてしまえば黄金の日々

小川純子（昭和43年卒）

最後の授業に出席し、レポートを出し終った途端、肩の力がすっと抜けていくような気がしました。去年の暮の事です。NYU（ニューヨーク大学）の修士課程を無事終了した安堵感からだったのでしょうか。教育学部外国語教育—日本語教育専攻、これが'89年秋学期から1年4か月間、私が学んだ課程です。

'86年からのアメリカ暮して、ボランティア活動として始めた日本語教育ですが、やればやるほど難しさを感じ、どこかで教授法や言語学の勉強をきちんとしたいと思っていた時に見つけたのがこのコースでした。それから TOEFL を受験し、上智の成績証明書を出し、NYU の面接を受けた後、入学が決まりました。必修科目は日本語関係（日本語学等）の他、比較文化論や外国語教授法、それ以外は比較的自由に選択できます。私は TESOL（英語を母国語

としない人達に教える英語の教育カリキュラム）の中からいくつか（一般言語学等）選択し、結局、TESOL が私の副専攻となりました。

級友達は、日本語関係の科目では殆んど日本人ですが、他の科目の時は、フランス語やドイツ語、そして英語（ESL）の教師をしているアメリカ人達と一緒にになります。この人達はどこかの学校で言語を教えた後、そのまま大学にかけつけ、学生として授業を受ける人達が殆んどでした。従って体験に基づいた意見がディスカッションの場で飛び交う事となります。こういう際に、丁々発止とやり合ってみたいと思ってもやはり英語力のハンディがあり仲々、思い通りにはいきません。読み書きの速度でも同様です。それでも、ペーパーも書かなければいけないし、プレゼンテーションもあるして、四十路を過ぎた身には結構しんどい事でした。そんな時に、日本人教授による日本語関係の授業に出るとほっとしま

した。使われている言語が100%理解出来るのは、何と精神衛生上良いものかと、しみじみ感じた次第です。

せい一杯手抜きしたとはいえ、一応はこなした主婦業、ニュージャージー州にある自宅からマンハッタンのダウンタウンまでの通学等、色々ハンディを抱えながらの久々の学生生活でしたが、アメリカのそしてアメリカ人のある一面を見る良い機会でもありました。何はともあれ落ちこぼれずに終了する事ができました。タイプ・ミスの多い私には頼もしい助っ人となったマッキントッシュのワープロ、そして「過ぎてしまえば黄金の日々」とどこかで聞いたようなセリフをはきながら、励ましてくれた夫に感謝する事にしましょう。

もうすぐM・Aのdiplomaが届きます。卒業式は5月、NYUのスクールカラーの紫のガウンを着て式に出る頃は、キャンパスの真ん中にあるワシントン・スクエアは若葉の緑で一杯になるでしょう。

(1991年3月にご投稿いただきました)



ワシントンより近況報告

NHK ワシントン支局 田中淳子 (昭和63年卒)



10月17日、ワシントンに来てからちょうど一年になる。大学時代、留学の10か月間があんなに長かったのに、今回はまるで長期出張にでも来たような気分だ。とにかく、目の前で繰り広げられる「世界情勢スペクタクル」についていくのがやっとの、あっという間の一年間だった。

湾岸戦争、ゴルバチョフを招いてのロンドン先進7か国サミット、START軍縮条約に調印したモスクワ米ソ首脳会談、そしてソビエトでのクーデター失敗・連邦崩壊……。どれもこれも歴史の教科書を飾るであろう出来事ばかりだ。そんな歴史的出来事取材し、それぞれについて、自分が垣間見たり、聞きかじった、サイドストーリーを持つことができ

た。そんなサイドストーリーが案外、その出来事の本筋をついていたりする。劇的な出来事のひとつひとつをそうやって自分なりに消化していく一年間だった。まだまだ消化不良の部分が多いが、随分記者としての「栄養」を付けさせてもらったと思う。

そんな激動の一年間で、最も興奮する出来事が最近あった。米国最高裁判所に指名されたトーマス氏のセクシャル・ハラスメント疑惑を巡って全米が揺れたのだ。(ご存じない方は是非アメリカの新聞や雑誌でご一読を!)世界史とは言わないが、米国誌、特に社会誌、女性誌にはしっかりと刻み込まれたことと思う。疑惑追及のため、トーマス氏と告発した女性を証人として開かれた公聴会は、全米で一部始終テレビ放送され、大きな反響を呼んだ。それだけ全ての人、特に女性にとってセクシャル・ハラスメントが身近で深刻な問題だからだろう。私も、普段「政治もの」を追い掛けているのとは全く違う思い入れで取材した。連日十数時間に上る公聴会の取材レポート、番組(衛星放送で1時間番組を放送した)に追いまくられ、睡眠時間1~3時間の日が1週間続いたが、興奮したこと!結局トーマス氏は最高裁判所に承認されたが、疑惑は解決せずじまいだし(もともとセクシャル・ハラスメントは証明しようがない犯罪)、公聴会はこの問題に加え、人種差別など様々な問題を提起した。まだまだ私はこの1週間の出来事を消化し切れていない。ちょうど今、「これを入りに何か番組作ろうよ。」などと、同僚と相談しているところだ。

会員名簿作成にあたって

本会の事業の一つに会員名簿作成があります。本年度は3回目の発行の年に当たり、平成4年3月発行をメドに準備を始めております。ソフィア会事務局のご協力を頂いて最新かつ正確な名簿にすべく努力する所存です。つきましては同封のハガキに必要事項をご記入の上、ご返送下さい。また、別紙同封の消息不明の方について情報がございましたら、ハガキの通信欄でお知らせください。

決算・予算に関する報告

1990年度決算および1991年度予算が1991年4月20日に開かれた臨時総会において承認されました。また、1991年度会計監査委員に石川雅弥(40年卒)、小室俊明(57年卒)の両氏が選任されましたので、ご報告致します。

1990年度上智大学英語学科同窓会収支決算報告書

(単位:円)

	科 目	予 算	決 算	備 考
取 入	1. 前期よりの繰越金	2,055,076	2,055,076	1989年度より繰入れ
	2. 入 会 金	194,000	299,000	1,000円×299人
	3. 会 報 費	1,841,000	2,276,000	2,000円×1,138人
	4. 受 取 利 息	20,000	175,446	普通預金、郵便貯金、債券購入
	5. 雑 収 入	0	90,311	本会設立準備委員賞賛金を繰入れ
	合 計	4,110,076	4,895,832	
支 出	1. 名簿作成積立金	500,000	500,000	
	2. 名簿作成準備金	50,000	0	
	3. 会 報 作 成	400,000	501,004	10号, 11号, 12号
	4. 会 報 郵 送 料	770,000	842,272	10・11・12号分
	5. パーティ補助金	100,000	15,000	出欠調査はがき印刷代
	6. 女性セミナー	60,000	60,000	
	7. 常任委員会運営費	10,000	0	
	8. 事務局運営費	300,000	441,256	封筒・振込用紙印刷代、振込手数料、学生アルバイト、宛名ラベル打出し代等
	9. 幹事会運営費	30,000	0	
	10. SELF援助金	10,000	150,000	1989年度未払い分5万円を含む
	11. 講 演 会	50,000	0	
	12. 子 備 費	1,740,076	26,000	故レーニー先生への生花等
	合 計	4,110,076	2,535,532	
	差 引 収 支		2,360,300	1991年度へ繰り越し

監査役吉田正明(44年卒) 監査済(1991年3月31日)

1991年度上智大学英語学科同窓会予算

(単位:円)

	科 目	予 算	備 考
取 入	1. 前期よりの繰越金	2,360,300	1990年度より繰入れ
	2. 入 会 金	200,000	1,000円×200人
	3. 会 報 費	2,000,000	2,000円×1,000人
	4. 受 取 利 息	140,000	預金利息
	5. 雑 収 入	0	
	合 計	4,700,300	
支 出	1. 名簿作成積立金	500,000	
	2. 名簿作成準備金	100,000	組み直し等編集費
	3. 会 報 作 成	400,000	会報2回発行
	4. 会 報 郵 送 料	600,000	会報2回分
	5. 会 報 発 送 料	70,000	封筒詰め・発送費
	6. パーティ補助金	150,000	
	7. 女性セミナー	60,000	
	8. 常任委員会運営費	10,000	
	9. (事務局運営費)	—	
	9. 事務処理費	350,000	封筒印刷等通信費
	10. (幹事会運営費)	—	
	11. BTF購読運営費	200,000	講師交通費
	12. SELF援助金	100,000	
13. 講 演 会	50,000		
13. 子 備 費	2,110,300		
	合 計	4,700,300	

会費お支払いのお願い

本会の諸活動は、卒業生の皆様からの会費で運営されています。事務局一同は、より一層の活動内容の充実と拡大を図ってゆく所存です。同窓会の円滑な運営のため、まだ会費の未納の方は、同封の振替用紙で最寄りの郵便局(青色の用紙)または銀行(赤色の用紙)より是非お支払いいただくようお願い致します。尚、卒業年度の明記をお忘れなく。

また、今まで一度も会費をお支払いいただけていない方は、入会金も併せてお支払い願います。

入会金:1,000円

年会費:2,000円(できれば3年分お願いします)

<会費お支払い状況>

封筒に貼付してあります宛名ラベルの右上部をご覧ください。

朱書きの数字、例えば“91”とあれば、入会金および1991年度分の会費が支払われている、

“95”とあれば、入会金および1995年度分までの会費が支払われている、

朱書きで“入”とあれば、入会金は支払われているが、1991年度分の会費が支払われていない、

「朱書きのない」のは、今まで一度も入会金も会費もお支払いいただけていないことを、それぞれ表しています。

事務局長